



京都府
京丹波町

特集1

林業で地方創生

日本のふるさと。自給自足的循環社会●京丹波

京都府の中央部、丹波高原の由良川上流部に位置する京丹波町は、標高400～900メートルの緑深き山々に囲まれた町です。古くから、都と丹後・山陰地方を結ぶ交通の要衝として栄え、木材をはじめクリやキノコ類などの特産林産物がさかんに生産されてきました。



和知全景

京丹波町の特産品（一例）

新丹波黒



肥えた土壌と昼夜の気温の差が大きいという気候に恵まれて、ほかの地方の黒大豆に比べて大粒でコクがあります。古い都々逸にも「丹波の丹波黒は色は黒でも味が良い」とうたわれ、古くからその美味しさが全国に浸透していました。

紫ずきん



丹波黒大豆から生まれた枝豆。豆の薄皮が薄紫色をしていることや、豆の形が頭巾のようであることから名づけられました。丹波地方の農家では、「祭りのえだまめ」として、昔から親しまれてきました。粒が大きく、コクと甘みがあるのが特徴です。

丹波くり



丹波くりは、京の伝統野菜以上ともいえる歴史をもつ京都の秋を代表する味覚。丹波の栗は古くから献上物として都に運ばれるとともに、江戸時代には年貢米の代わりとしても上納されていました。それゆえに、生産者の研究心も強く、時代時代に品種の選定や熱心な栽培技術の改良が成されてきました。

京丹波町といえば黒豆、栗、まつたけといった食材の産地として有名です。夏から秋にかけて発生する「丹波霧」に代表される丹波高原独特の気候と風土を活かした農業が盛んで、とりわけ、「新丹波黒」「大納言小豆」「丹波くり」「紫ずきん（黒大豆の枝豆）」「京かんざし（早取り金時にんじん）」などは、丹波ブランドとして全国に名を馳せ、多くの人々を魅

了しています。本町では、まちの魅力の一つであるこれらの「食」を支える源として森林を位置づけ、森林の保全はもとより資源を活用するとともに、次代を受け継いでくれる子どもたちが学びや体験を通じ、自信や誇りを醸成してくれるよう、環境教育（木育）や農村文化の伝承を目的とした実践的な取組を推進しています。

1 「食」の京丹波く「食」の源としての森

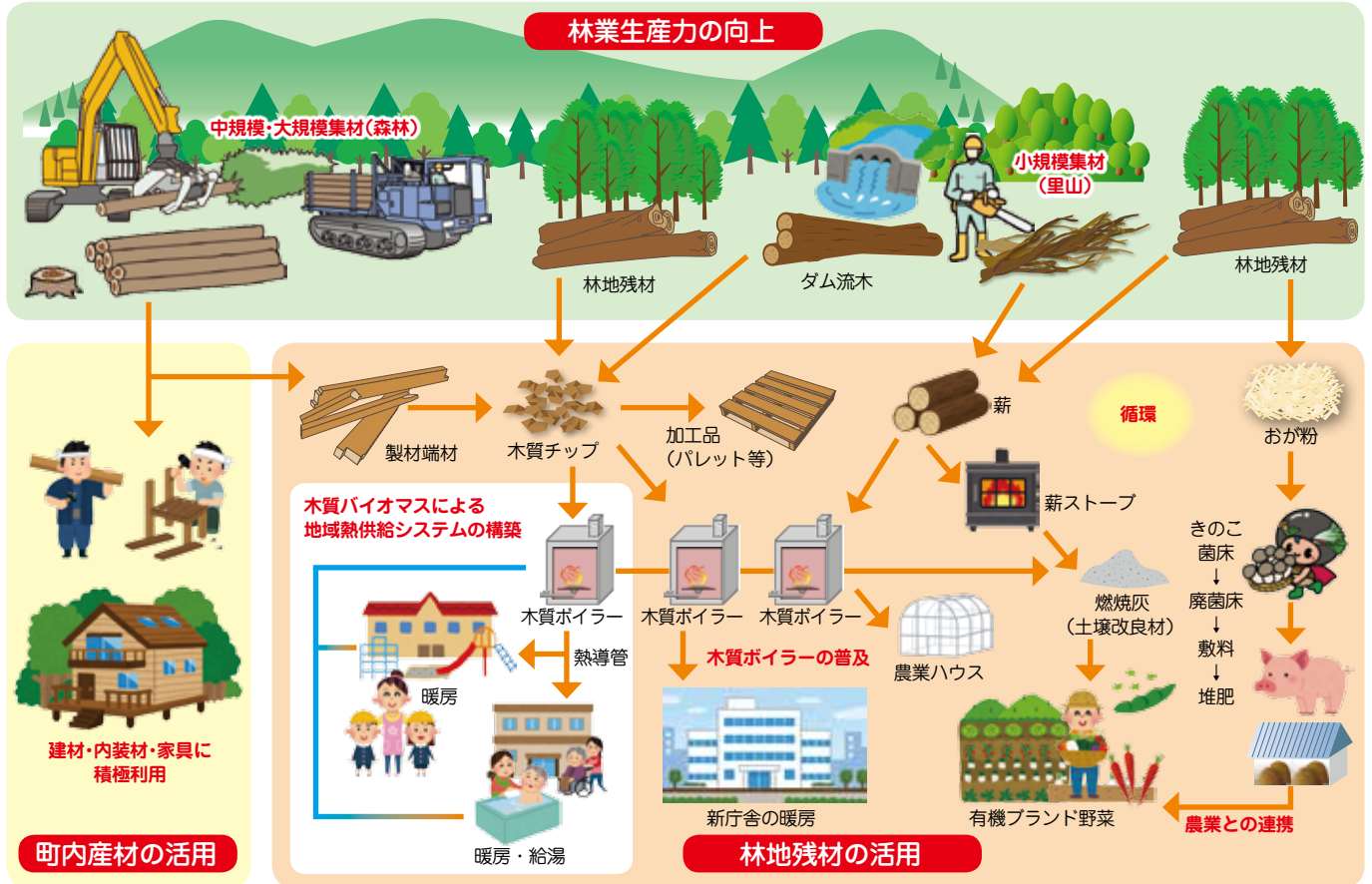


「丹波霧」の発生





森林資源のフル活用プロジェクト



2 「森」の京丹波

本町は、町面積の約8割が森林です。森林面積の99%が公有林と私有林を合わせた民有林で、スギ、ヒノキ林が4割、マツ林が2割、広葉樹林が4割となっています。豊かな森林資源は、昔から薪や炭、クリやキノコなどの山の恵みをもたらし、町民の暮らしや地域経済を支えてきました。

平成27年に策定した「京丹波町創生戦略」(以下、創生戦略という。)では、基本理念「日本のふるさと。自給自足的循環社会●京丹波」の二で、「森林」を「食」

「子育て力」「地元力」とならぶ本町の強みと捉え、これらの強みを最大限に活かして、「資源の循環」「暮らしの循環」「経済の循環」「人材の循環」を目指すこととしています。

さらに、「自給自足的循環社会」を構築するため、森林資源等のバイオマスの面からの具体的な事業展開を示す「京丹波町バイオマス産業都市構想」(以下、バイオマス産業都市構想という。)を作成しました(現在、国のバイオマス産業都市の選定に向けて申請中)。

3 林業・木材産業の再興に向けて

創生戦略を実現していくためには、地域を支えてきた林業・木材産業の再興が欠かせません。そのため本町では、低コストで効率的な施策により生産性を上げるとともに、製材等としての利用に加えて伐採作業時に発生する林地残材も含めて、新たなマテリアル利用やエネルギー利用を推進することにより、地域内で資源と経済が循環する仕組みを構築し、新しい産業や雇用の創出を図ることが重要と考えています。

市構想では、
①町内産材の活用(建材、家具などの需要の喚起)によって、
②林業生産力の向上(効率的な木材生産)を図り、
③林地残材の活用(農業や畜産でのおが粉利用や、木質ボイラーの普及等)を総合的に取り組むことにより、根元から梢端まで、余すところなくフル活用(＝森林資源のフル活用プロジェクト)することとしました。

京丹波ぬく森のイスペゼント事業の流れ



①原木の伐採（京丹波森林組合）



②木材の製材・乾燥（町内製材所）



③製材品の加工（町内家具店等）

京都トレーニングセンター



3.1 町内産材の活用

本町では、木材需要の拡大、特用林産物の振興など、町全体で森林資源を活用する「木づかい文化」の醸成に力を入れ、町民一人ひとりが木のよさ、木のぬくもりを感じ、木を使う環境を作る取組を推進しています。

平成26年から始まった京丹波ぬく森のイスペゼント事業では、「京丹波町に生まれてくれてありがとう」という思いをこめて、京丹波町で生まれた新生児に、木製のイスをプレゼントしています。町内産ヒノキを使い、森林組合、製材所、家具店などが連携して「オール京丹波」で製作しています。このイスには、木のぬくもりに加え、製作に関わった人たちの心の温かさもこめられており、受

け取った方からは、「角がなく、肌ざわりがよい。」「手作り感があり、置いているだけで温かみを感じる。何より木の香りがするのがよい。」など、大変好評をいただいています。さらに、この事業を通じて、製作に携わった林業・木材産業関係者が、自らの仕事へのやりがいや誇りを再認識する機会にもなっています。

また、今年7月、ジュニアアスリートの競技力向上及び健康体力維持増進の拠点として、京都府が京丹波町内に整備した京都トレーニングセンターでは、構造物や内外装材に町内産のスギやヒノキが約800㎡使用されました。本施設は、府内最大の木造公共建築物となっており、スポーツ環境の充実と振興の面で、また、木材利用を積極的に進める町のシンボルのひとつとして大きな期待が寄せられています。

林業・畜産業・農業の連携による資源循環

～新たなマテリアル利用の取組～

平成13年に京丹波町、京丹波森林組合、民間企業の出資により設立した瑞穂農林株式会社では、スギの間伐材を活用したおが粉を菌床にしてハタケシメジやホンシメジを生産しています。ハタケシメジは国内シェアの8割以上を占め、ホンシメジは「京丹波大黒本しめじ」として京のブランド産品※に選ばれ、認知度が上がっています。収穫を終えた廃菌床は養豚用の敷料に使われ、使用済みの敷料は堆肥化された後、農地に還元されています。



シャキシャキとした不思議な食感のハタケシメジ



濃い茶色の傘に、大黒様のおなかのように膨らんだ白い軸の大黒本しめじ

※京のブランド産品：京野菜や他の農林水産物の中で優れた品質が保証され、安心、安全と環境に配慮した生産方法に取り組んでいるものを認証したもの。現在、府内で31品目（加工品含む）が認証されている。



将来の林業を担う 若者が学ぶ林業大学校

平成 24 年に西日本で初となる林業専門の「京都府立林業大学校」が京丹波町で開校しました。

林業大学校では、

- ①実践的な技術・知識を身につけて第一線で活躍できる人材
 - ②森林保全活動から野生鳥獣対策まで幅広い地域活動を支える公共人材
 - ③森林組合等林業事業者の経営力の向上を支える人材
- の育成を教育理念として、将来の林業を担う若者が全国から集まり、即戦力として活躍するのに必要な技術や知識を修得しています。

これまでの卒業生 58 名のうち 7 人が町内で就職しており、積極的に地域活動に参加するなど、地域の担い手としても大いに貢献しています。

「日本海ウォーキング」新入生歓迎行事。京丹波町から舞鶴港まで約 50km を歩く。



伐木造材の実習



高性能林業機械作業システム(車両系)の実習



完成・贈呈



④仕上げ作業
(町内ボランティア)



森林の地形図



路網設計シミュレーション

3.2 林業生産力の向上

本町では、持続可能な森林管理を通じて地域林業の発展につながる仕組みづくりを目的に、「森林資源量解析システム」を今年度から活用しています。本システムでは、航空写真と航空レーザー測量を組み合わせた航空測量技術により、樹種、樹高、材積などの森林資源情報、傾斜などの地形情報、林道などの基盤情報を森林GISで一元管理します。また、町役場と森林組合を情報通信ネットワークで

結び、森林資源情報を共有することができるとなっています。

森林組合の職員は「森林の状況を正確に伝えられるので、集約化の同意を取り付けやすくなる。山全体を見渡せるので、将来を見据えた道づくりも可能だ。京丹波町の豊かな森林を適正に管理し、次世代に引き継ぐために、このシステムは大変意義がある」と話しています。

今後、本システムを活用しながら、路網整備の効率化と高性能林業機械を組み合わせた低コスト作業システムに取り組みます。

3.3 林地残材の活用

林地残材をバイオマスエネルギーとして活用するため、平成23年度に町内の宿泊施設に小型の薪ボイラーを設置したほか、薪ストーブの普及に力を入れていきます。役場支所や道の駅などはもちろん、住民生活レベルでも、薪ストーブ等の購入に対する助成を行っています。

さらに、地域の森林資源を有効活用することにより、地球温暖化防止に寄与し、林業・木材産業の振興と地域活性化を図るため、平成28年度に中規模の木質

チップボイラー（出力規模…400kW程度、年間町内産材使用量…約470トン）を導入し、熱導管を敷設して特別養護老人ホーム及び保育所の暖房・給湯の熱を賄う地域熱供給システムを構築することとしています。

木材のエネルギー利用により、林地残材も「売れる商品」となり、収入増が期待できることから、森林所有者の施業意欲の向上につなげていきたいと考えています。また、これまで電気や灯油などの燃料代が町外に流出していましたが、町内産材を使用することで、町内の経済循環が図られると考えています。

地域熱供給システム配置図



4 次世代に引き継ぐために

大規模な製材工場やバイオマス発電所の建設が全国各地で進んでいます。京丹波町にはこうした大型施設はありません。京丹波町の豊かな森林資源を次世代に引き継ぐためには、背伸びせずに身の丈にあった取組が必要だと考えています。

林業・木材産業の再興に関しては、まだ緒に就いたばかりですが、町民、事業者行政が一丸となって地道でも着実に歩みを進める「京丹波スタイル」のまちづくりを進めていきます。

森の京都博

～亀岡市・南丹市・京丹波町・福知山市・綾部市・京都市右京区京北で開催中～

第40回全国育樹祭を中核イベントとして、「森の京都」エリアに位置する京都府中部の6市町において、さまざまな交流型イベントが、春夏秋冬1年にわたり開催されています。京丹波町でも多彩な催しが行われており、近代農業教育発祥の地としての歴史をもつ「ウィードの森」での森林体験プログラム、民俗芸能の和太鼓や浄瑠璃の公演、山村体験などが行われています。

10月10日(月)には、丹波広域基幹林道をフィールドにした自然体験型ウォーキング「森の京都エクスカージョン」も開催されます。



森のぶるぶ (5月5日開催)
明治9年に開校した京都府農牧学校の主任教員ジェームス・オースチン・ウィード氏が開拓した「ウィードの森」をフィールドにした「森で遊ぶ・食べる・見る・学ぶ」の体験プログラム



はるいろさくらまつり (4月2～3日開催)
わち山野草の森で行われた森とアートをコンセプトに行われたイベント